

李登輝氏ビザ発給

16年ぶり訪日の夢かなう

【台北20日〓矢島誠司】

台湾の前總統、李登輝氏（七）の訪日が決まった。日本統治時代の台湾に生まれ、

「二十二歳まで日本人だった」という李氏は、戦後も日本に強い関心を持ち続け、母校の京都大学を訪れることや、若き日に愛読した芭蕉の「奥の細道」を夫人とともに歩きたいという日本再訪の夢を抱き続けてきた。もちろんその夢の中には、政治家としての計算があることも否定はできないだろう。

政治家のしたたかさチラリ

李登輝氏が日本を訪れるのは、副總統時代の一九八五年（昭和六十年）九月、中米三方国訪問の帰途、東京に立ち寄り、中嶋嶺雄氏（現・東京外語大学学長）らと会って

以来で、じつに十六年ぶり。十六年後の日本は李氏にどう映るか。

李氏は一九二三年（大正十二年）、台北市郊外で生まれ、旧制台北高校を卒業後、戦時中の四三年（昭和十八年）に京都帝国大学農学部で留学、一年二月月ほど農業経済学を学んだ後、四四年（昭和十九年）に学徒出陣で高雄の高射砲部隊に

配属された。戦後、台湾に戻るが、実兄は戦前海軍に志願、昭和二十年に戦死し、日本名、岩里武則の名前で靖国神社にまつられている。

戦後は、台湾大学教授時代に蔣経国總統に行政府に招かれ、台北市長、台湾省主席などを経て八四年に副總統。八八年に蔣

経国總統の急死で總統に昇格。初の台湾出身の總統となった。以後は昨年五月に總統を退任するまでの十二年間、台湾の自由化、民主化に努めたことは周知の通りだ。李氏はなぜ日本に行きたいかについて、かつて

「ぼくがこの十二年間に台湾で行った政治改革、民主化を日本のみなさんに話したいのですよ」と語ったことがある。

ただ、中国にとっては台湾の民主化を語られるのが一番こわい。台湾の民主化はすなわち台湾の自主独立につながることを考

えているからだ。李氏はその中国の危機（きき）を十分承知しながら、自由、民主を語る「自由、民主の普遍の価値をしゃべってはいけない」というのならどうにも

ならない」と強い調子で言った。中国にとってはやはり手ごわい相手なのだろう。

米もビザ発給

【ワシントン20日〓西田令一】米国務省当局者は二十日、五月上旬に訪米を計画している台湾前總統の李登輝氏に対し、米台間の民間交流の米側窓口である米国在台北協会の現地事務所が観光ビザを発給したと語った。

李氏側からのビザ申請は二十日に行われ、「李氏は私人であり、台湾の私人の訪米は普通に行われている」として、即日、発給されたという。李氏は自身の母校でもある米コーネル大学に学ぶ孫娘を訪ねるなどの目的で、五月二日から四日まで訪米する計画だ。

東京外大学長（国際関係論）

中嶋 嶺雄氏

台湾の前總統、李登輝氏への査証（ビザ）発給で、中国は当初はいろいろと抗議してくるだろうし、駐日大使を召還することもありうる。しかし、それは中国側にとっての恥となることであって、日本はかまらべきではない。日本はそうした抗議に影響されることなく、「たいした問題ではない」ときげんとしていれたい。

中国に対しては、これほど世界が一つになり、情報が飛び交い、だれもがこの国にでも行ける時代に、李氏だけは日本に行かせないなどという世の流れと逆行する要求は、「もう通用しない」と言わなくてはならない。李氏が日本で何か発言したとして、それが気にいらなければ言論で反論すればいいではないか。

また、中国が何かというときかけてくる軍事的恫喝（どうかつ）も有効ではないことを分かせないと、国際社会に生きる中国自身にとって不幸だ。ちょうど、教科書検定や靖国神社参拝が問題となっている時期だと心配する向きもあるが、逆に、こうした国内問題への理不尽な要求も、今後は通用しないことを示すいいチャンスだ。日中友好を本意にいうのであれば、中国には、みっともない抗議や対抗措置はとらな

日本は中国に毅然とした対応を

（談）